

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 相川京子

所属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科・理学専攻

1. 旅程に関して

第2日目の終日の口頭での研究発表を中心として、行程には研究室見学、キャンパスツアー、ポスター発表がよく工夫された構成で盛り込まれており、有意義な3日間を過ごすことができたと思う。梨花女子大学での滞在では、寮および飲食、日用品購入ができる施設がキャンパス内に整えられており、安全管理もよく、快適な滞在ができたと思う。キャンパスの施設に関するリーフレットも情報豊富であった。

2. 研究発表に関して

英語での研究発表はどの発表者もよく準備してきており、落ち着いて発表することができ、自分の研究をよく伝えることができた。これは事前の練習、トレーニングの成果だと思う。一方、発表に関して学生からの質問・発言がなかったことは残念であった。理由の一つとして、発表者の研究が幅広い分野にわたっており、バックグラウンドを異にする研究内容に質問の糸口を見つけるのが難しかったことがあげられる。事前に要旨を読んで質問を考えてくることを課題とすることや、座長(学生)を中心に各セッションの開始前に交流の時間を持つなど、今後は学生から積極的に質疑応答が展開されるような工夫が必要と感じた。

3. 学生の交流に関して

大学を異にする学生間で親しく交流するには3日間の行程は忙しく、短かったかもしれないが、会食の時間等を通じて、梨花女子大学の様子を聞いたり、メールアドレスの交換をするなど、今後の交流のきっかけを学生同士で作ることもできたようである。ポスター発表では、学生同士での質疑応答の様子もみかけられた。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 伊藤貴之

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科・理学専攻

1. 参加学生の発表

日本からの参加学生は非常によく練習している印象を受けた。また、全体的にプレゼン資料が韓国と比べてよく工夫されている印象を受けた。由良先生をはじめとする発表練習体制の賜であろう。ただ、全体的に質疑は韓国のほうがスムーズであり、本シンポジウムに限らず 日常的な英会話量が多いのであろうと想像された。

2. 当日の問題点

参加学生からいくつかの問題点を指摘された。大きく分けると以下の 3 点である。1) 参加者の分野がずれていた。韓国から情報科学関係の参加者がなく、逆に日本から数学関係の参加者がなかった。2) 日韓の学生間の交流の機会がほとんどなかった。3) 宿泊施設のアメニティ等の不足について事前情報が足りなかった。いずれも解決可能な問題であり、次回の課題と位置づけられればと思う。

3. まとめ

上記のように小さな問題点はいくつかあげられるが、それでも参加学生は概して、韓国での3日間を充実して過ごしているように見えた。それだけでも本シンポジウムは成功したと言っていると思う。また、梨花女子大のキャンパスにインパクトを受けた学生が多いようである。ぜひとも次回以降も予算の許す限り多くの学生を派遣し、海外の大学のパワーを実感してもらいたいと感じた。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 曹 基哲

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科・理学専攻

1. 英語による発表について

日本側、韓国側共によく準備されたシンポジウムであった。お茶大からの参加者が多かったが、羽田空港への集合、現地到着後の移動などトラブルがなく、最後まで予定を消化できたことは成果だと思う。学生は、英語によるプレゼンテーションの練習を、時間をかけて行った形跡がうかがえ、まずは自分が伝えたいことを伝えるという点では目的が達成できたと言ってよい。殆どの学生の英語によるプレゼンは私の予想を超えたレベルであった。英語による質疑応答で戸惑う学生もいたが、今後場数を踏むことでうまくできるようになると思う。梨花女子大学の発表者は英語も上手で、使い慣れている(英語で話す機会が多い)印象であった。

2. 研究発表のプログラム構成

研究発表プログラムでは、日本側、韓国側で発表分野のミスマッチが目立った。第二会場ではお茶大側で情報科学の発表が多かったのに対して梨花女子大側では数学、統計学の発表が多く、参加者が研究テーマを共有できるとは言えない。そのためか、日本側、韓国側共に発表者に対する学生からの質問が皆無であった。今回のような大学間のシンポジウムでは、ある程度発表分野のミスマッチがでるのは避けられないので、シンポジウムの性格をどう考えるか(学術交流をメイン、もしくは学生間の親睦をメイン)、によって今後の対応を検討するといと思う。

3. 学生間交流

レセプション及びバンケット会場では席の配置を決めていなかったため、各大学毎に集まってしまう、学生間で十分な交流ができなかったように思う。座席の配置を、異なる大学の学生たちと交流しやすいように他大学学生同士で隣合わせにするとか、迎え合わせにするとかの配慮が必要であろう。

4. 今後の課題

上述のように、シンポジウムの性格(学術交流優先か、親睦優先か)を3女子大学の間で合意した上でプログラムを構成すること、学生間の交流がより促進できるような配慮をすることなどである。

日韓3女子大学交流合同シンポジウム参加報告: Symposium Report

参加者名(Name): 由良 敬

所 属(Affiliation): 人間文化創成科学研究科・ライフサイエンス専攻

今回のシンポジウムにおいては、その企画段階から参加させていただいた。ここでは、参加学生の発表練習とシンポジウム当日の状況について簡単に報告する。

1. 参加学生の発表練習

週1回90分間、全参加学生の英語口頭発表とパワーポイントの作成法を、岡村浩司特任講師を中心にして行った。練習開始の際には、参加学生の発表能力及び英語力は決して高くなかったが、練習最終回(リハーサル)においては、当初から比較しての上達が見えたのはよかった。しかし、シンポジウム当日において、梨花女子大の学生と比較した際には、まだまだ見劣りしたのは残念であった。本学においても日頃から、学生の発表方法と英語の訓練が必要であることを痛感した。

2. シンポジウム当日

様々な困難を乗り越えて、シンポジウムを開催できたのは大変によかった。学生諸君の発表は、いずれも教員による助けを必要とせず、各人が成し遂げたことは大きな自身になったと思う。シンポジウムにおいて、梨花女子大-日本女子大-お茶の水女子大の教員間の交流が図れたことは非常に重要だと感じる。本シンポジウムを大学間交流と位置づけて、未永く開催できるとよいと思う。口頭発表の際に学生からの質問がなかったことは残念であった。また発表分野に多少の行き違いがあったことも惜まれる。3女子大学の学生間の交流が3日間でもう少し活発にあってもよかったとも感じる。しかしこれらのことは、回を重ねて運営が軌道に乗れば、十分調整できることだと受け止めている。なによりも第1回目において、人間的なつながりができたことが重要だと感じる。梨花女子大側は、学部長付きのアルバイト学生(教育学部や音楽学部の学生)が非常にこまめに運営の補助をしており、本シンポジウムの開催の成功と継続に対する梨花女子大学理学部長の意気込みを、そのようなところにも感じた。